

詩作ワークショップの実践と考察

— 受講者自身から発生する言葉を自身で掴まえることが 出来得る環境をつくるために —

About Poetry Workshops

村田 仁 MURATA Jin
(デザイン領域)

【要旨】

本稿では、筆者が美術館および図書館で実施してきた詩作ワークショップの実践を振り返り、その企画意図・実施過程・成果および課題を整理する。芸術教育的観点から、詩作を促す環境、機会を再現するための可能性を考察することを目的とする。

1. はじめに

研究、実践の背景、その目的、方法

日本における国語教育のなかで、詩の授業時間は難しく、入試等の学科試験にも用いられるのが少ないことから、限られた授業時間のなかでは重要視されないということは、よく言われる。なぜ詩の授業は難しいのか。それは詩自体が表現として、主語、述語、修飾語などを変容して用いるなどから、意味解釈に幅があり、曖昧なところが内包されているからである。それが詩の魅力ともなっており、画一的な正しい解釈を教えることを目的としたときには、適さない教材となる。そもそも、詩に限らず、あらゆる文芸作品を読むときに、画一的な解釈というもの自体が、限られた範囲でしか有効ではない教育だと言わざるをえないが、先述の入試対策等を前提とした教育の状況では、選ばれる方法である。

詩の教育が機能すること自体が、芸術を育むための創造的な教育の環境には有効であると筆者は考える。詩こそが、人間が人間らしさを謳歌し、社会を自由に進ませる原動力になる。それが有効であることは、他のあらゆる種類の画一的な教育に対しても契機になるのである。

筆者は、2010年より「詩作ワークショップ」を美術館や図書館で行っている。企画展や、催事に合わせて、個々にテーマをもって企画しているものであり、教育機関での授業のなかでの取り組みではない。ただ、そこでは、講師の指示命令で詩を書くということは決して行わず、受講者自らが、自らのうちから言葉を発生させ、それを自身で掴まえることに成功していた。それは、詩作ワークショップの環境がつくっていると考える。その結果を見直すことにより、詩の教育に必要な要素を、再現可能にするための検証ができるのではないか。

検証素材

2018年に名古屋市の鶴舞中央図書館で行った詩作ワークショップ「図書館の森で迷子を楽しむ」と、2023年に愛知県清須市のはるひ美術館での「谷川俊太郎 絵本百科展」の関連イベントで企画された「まんまえ投壘通信」を検証素材とする。

2. 実践の概要

名古屋市の鶴舞中央図書館で行った詩作ワークショップ「図書館の森で迷子を楽しむ」2018年10月6日(土)に開催。鶴舞中央図書館の「秋の読書イベント」で企画された。

参加者は、図書館内を歩き回り、三冊の本を見つけてくる。それは「私が読んだことがある一冊」と「読んだことがないけれども惹かれる一冊」「NDC ルーレットで当たった本棚から選ぶ一冊」。

それらの三冊から、文字列を引用し、それらを構成して各自が詩をつくる。最後には各自が詩を朗読発表し、終了となるもの。参加者は10名。70代から、大学生まで。

「迷う」という「非効率」なことを楽しみ、詩作に繋げるといふ。創造的な表現が、行動や思考の蓄積の上につくられるものであるという環境を設けている。また、詩作そのものへの添削等は行わない。質問に対する対話のみを行っていく。

なお、2022年10月29日にも、北名古屋市図書館でも同内容を開催している。

鶴舞中央図書館 web サイト行事報告

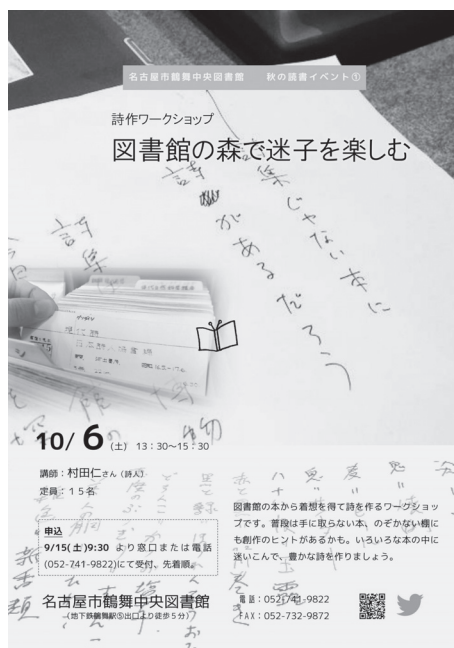
https://www.library.city.nagoya.jp/oshirase/topics_gyouji/entries/20181016_03.html

筆者 村田 仁 web サイトの活動記録

<https://jinmurata.jpn.org/archives/830>

愛知県清須市、はるひ美術館にて「谷川俊太郎 絵本百科展」の関連イベントで企画された「まんまえ投壘通信」。2023年10月22日(日)に開催。参加者は15名。60代から、10歳まで。

会場の一室には、新聞紙が広げられており、入り乱れて床に敷かれている。村田はそれを「世間の荒波」と呼ぶ。今朝の各社新聞だ。「世間の荒波」を囲むかたちでテーブルが



図書館の森で迷子を楽しむ チラシ-1860×2632

並んでいて、壇が置いてある。壇の形状はばらばらで異なっていて、参加者は選んで机に向かう。それぞれが「世間の荒波」を囲んで向き合うかたちになる。「投壇通信」とは「壇に手紙を入れて蓋をして、海に投げ、いつかどこかの誰かが読んでくれるだろうとするもの」。「詩」とはそういうものではないかとメタファーとして語られてきた存在である。参加者に「言葉」を紙に書き、壇に入れてくださいと指示をする。紙を入れた壇は「世間の荒波」に投げ入れられた。そして参加者が自ら、それぞれ誰かの壇を拾う。自分の壇は拾わないように、そして誰の壇と詮索しないようにと村田が話す。その人はまんまに居るかもしれないのは皆分かっているのを確認しあう。何も書いていない藁半紙が一枚配られる。壇に入れられた手紙を取り出し、開いて読む。その言葉を引用した詩をそれぞれが書く。各自、書いた詩を朗読し発表しあう。意見を交わす。壇の言葉は誰のものであったかは、話さない。手紙をまた壇に戻してもらう。参加者は各々の詩を持ち帰る。

他者を信じることと、他者への尊重を持つことを同時に行う、高度なコミュニケーションをつくりあげるワークショップである。ここでも、講師による詩の添削はいっさい行わない。質問と対話のみで、詩作に意見を述べる。



図書館の森で迷子を楽しむ ワークシート-e1554363467349

2024年11月23日にも、同内容を、AOAA（名古屋市栄、愛知芸術文化センター地下2F）にて開催している。

筆者 村田 仁 web サイトの活動記録

<https://jinmurata.jp/archives/2644>

3. 成果と考察（分析・考察）

「図書館の森で迷子を楽しむ」では、引用のみで詩作をするという高難易度のようなものがあるが、参加者らは、積極的に詩作を行う姿が見られた。実は、自身で言葉を編むという行為のなかで、引用することが主になるため、創作をする要素が減り、集中しやすくなる

と考えられる。

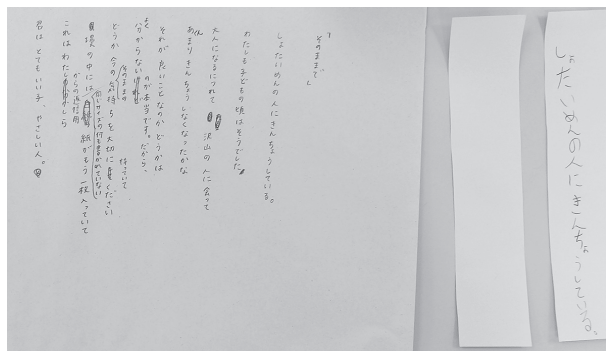
自身の言葉ではなく、図書館にある書籍の文章であるから、全体的に整った精度の高い言葉で綴られることになり、硬質な印象になりやすい。それを引用のパッチワークで、どうオリジナリティを出すかという課題も生まれる。

どのような本を選んでも、自分の感性が選び、集めるものは似通ってくる。詩は、そのような価値観を柱としたものであるから、それが受け入れられる場合は、肯定的な環境となる。

「まんまえ投壘通信」では、手紙を交わすような、会話に似た詩が多くつくられた。ここにいる誰かの言葉を受けて、詩をつくり発表するということは、必然的に本人が聞くことになる。つまり、他者に読まれることを前提として詩が存在する。これは、ひとりよがりになりかねない詩作の初心者にとっては、重要な意識をもたらす。匿名のSNSでは、読まれることがわかっているのに、人を傷つける言葉が並ぶ。まんまえ投壘通信のような環境で、誰かの言葉を傷つける詩作を行うことも物理的には可能ではあるが、そこをセキュリティを上げて防ぐことは行わず、詩を発した者が責任を持つ空間を保つこと（匿名で発表はできないようにする、平等に自身の朗読で発表する）で、それは起こりにくくなると考える。それこそが社会に、詩を表現する行為の根本である。



まんまえ投壘通信



まんまえ投壘通信 詩

4. まとめ（結論・今後の展望）

1 節の後半で述べたが、これらの詩作ワークショップは、教育機関の授業のように詩作の機会を半ば強制的に与えているものではなく、受講生が自らの意志で参加しているものである。そのため、詩作に興味が無い者を如何に案内するかという要素は無い。逆に、詩を添削されることにより、自身の表現力を高めたいと考える者にとっては、何を書いても肯定されるようで、物足りなく感じるという声もあろう。

添削は、画一的な正しさを押し付けるものであり、詩の創作とは相性が悪いのではないか。

自身から発生する言葉を自らが掴まえる行為を体得しない限り、詩作の力は育たないと

考える。そのためには、肯定は前提にあるが、無条件ではないという意志を持った環境が必要である。

それは、互いに創作した詩を鑑賞し合い、尊重しあったなかで意見を交わす関係である。それらを一時的な状況のなかでつくるための仕掛けを、これらのワークショップには設けた。

本研究の今後は、教育機関などでの展開での応用が、どのように必要か、不要かの見極めを課題とする。

参考文献

平田俊子『詩、ってなに？ (小学館 SJ・MOOK コ・ト・バ・を・ア・ソ・ベ！ Vol. 2)』小学館／2016年